

国語科(各教科の概要・授業案)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-02-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00024617

国語科

<研究主題>

主体性を高める授業過程

<主体性ある人間>

様々な状況や場面において、自己と集団・社会・ものとの関わりを意識しながら、
○自己や集団にとって価値あるものや課題を見付けだす
○自己や集団の取るべき行動を決定し、実践する
○自己や集団の決定や行動を振り返り、評価し、改善する
これらに、継続的に取り組むとともに、自己や集団を高め続けるよう努力する人間



<教科で育てたい生徒像>

豊かな言語感覚を身に付け、実生活等の様々な場面において、情報を的確に理解し、批判的に思考し、表現できる生徒

<教科で身に付けさせたい要素>

〔知識・技能〕【要素A】

- ・言葉、ことわざや慣用語の意味等の語彙に関する知識
- ・漢字や仮名遣い、句読点の使い方等の表記に関する知識
- ・言葉の決まりや働き等の文法に関する知識
- ・文章の組み立て等の内容構成に関する知識
- ・言葉遣いや、文体・修辞法等の表現に関する知識
- ・聞く・読む・見る等の理解に関する技能
- ・話す・書く・つくる等の表現に関する技能

〔思考力・判断力・表現力・その他の能力〕【要素B】

- ・文章の内容・表現や社会的・文化的価値を読み取る力
- ・比較・関連づけ等によって、状況を的確にとらえる力
- ・イメージを思い描いたり、言外の思いを察したりする力
- ・根拠に基づき筋道の通った発言や文章を組み立てる力
- ・自分の考えや思いを客観的にとらえ、意識的に吟味する力
- ・目的や状況に応じて、ふさわしい言葉や行動を選択する力
- ・自分の考えや思いを具体的な発言や文章で表す力

〔関心・意欲・態度〕【要素C】

- ・語彙を増やし、作品に関わる知識・理解を深めようとする態度
- ・表現力や理解力を高め、互いの考え・意見を深め合おうとする態度
- ・他者の見方・考え方を受容し、新たな見方・考え方を取り入れようとする態度
- ・新しい状況の問題解決において、進んでその課題に取り組もうとする態度
- ・新しい状況の問題解決において、過去の類似体験を探索し、利用しようとする態度
- ・言葉や作者への思い、人間の生き方や自然への思いを尊重する態度

<教科テーマ>

習得・活用の学びを通して個の「思考し、表現する力」を育てる授業づくり

○ 教科テーマ設定の理由

知識基盤社会の到来、グローバル化の進展など、急速に社会が変化する中、今まさに、これまでのような特定の専門領域に限定された知識だけではなく、広い視野に立った柔軟な知識を活用する能力が求められている。それは、実社会・実生活で生きて働く力であり、学びの基盤となる国語科で求める学力と重なる部分が多い。国語科として、そうした能力を養いながら、人格を形成していくことが、主体性ある人間を育むことにつながるのだと確信している。

また、平成 28 年度全国学力・学習状況調査（中学校国語）の調査結果から、中学生において、「伝えたい事実や事柄について根拠を明確にして書くこと」や、「課題の解決に向け、具体的な情報収集の方法を考えること」「語句の意味を理解し、文脈の中で適切に使うこと」が課題であることが明らかになった。

そこで教科で育てたい生徒像を、「豊かな言語感覚を身に付け、実生活等の様々な場面において、情報を的確に理解し、批判的に思考し、表現できる生徒」とした。そのような生徒を育てるために、教科で身に付けさせたい要素が、前掲の【要素 A・B・C】である。[関心・意欲・態度]【要素 C】を基盤とし、[知識・技能]【要素 A】の「習得」と「活用」を通して、[思考力・判断力・表現力・その他の能力]【要素 B】を育成する。この「習得」と「活用」については、相互に関連し合っており、習得してから活用ということもあれば、活用がその習得を促進することもある。両者の調和を図りながら、実生活の中で批判的に思考し、表現できる生徒の育成を目指していきたいと考えている。

そのためには、まず習得すべき知識・技能を実生活から離れた抽象的なものとせず、多面的・多角的な思考や最適な判断・表現をするための材料とすることが必要である。そして、その知識・技能を活用しながら、自らの経験を通して、物事を批判的に見たり（批判的思考）、自分の意識やその状態を自ら観察したりすること（内省）、また、経験から感じたことを概念化・言語化すること（表現）が重要だと考える。本年度は、これらを『『思考し、表現する力』』と定義した。

実生活では「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」が分けられることはなく、複雑に絡み合っている。実生活で生きて働く力の育成をするにあたっては、どれか一つに特化するのではなく、総合的に力を付けていく必要があると考えた。そこで本年度は、言語活動の工夫を通して「考え、表現する力」の育成を図りたい。

上述のような考えにもとづいて、本年度は教科テーマを「習得・活用の学びを通して個の『思考し、表現する力』を育てる授業づくり」とした。この教科テーマ実現のために国語科では、実社会や実生活に関連した課題やその場に応じた自分なりの最適な判断・表現ができるような課題の設定、学習材や授業形態の工夫に取り組んでいきたい。授業過程においては、課題発見の場面（個人思考の場面）、知識・技能の習得と活用、多面的・多角的な思考ができる場面（集団思考の場面）、経験を通じた批判的思考、内省ができる場面（個人思考に収束する場面）を設定していきたい。

○これまでの取り組みについて

1 研究方法

- ・ 3年生「読み比べて考えよう」、1年生「トロッコの名シーンを創り出そう」の実践をおこな
い、生徒の様子や追究用紙の記述を分析した。
- ・ 単元の学習前後の質問紙調査の回答結果、参観者の感想等を分析・考察した。

2 3年生「読み比べて考えよう」における授業実践について

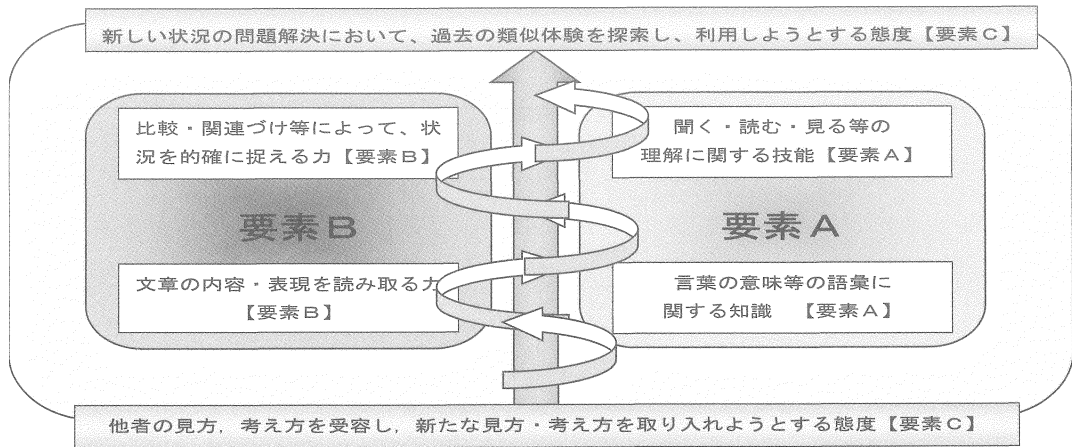
(1) 本単元について

生徒たちは多くの情報に囲まれて生活をしている。情報にあふれる世の中を生きていくためには、一つの情報だけを鵜呑みにするのではなく、多くの情報を「吟味・検討・評価」する力が必要となる。単独で文章を読んでいるだけでは、どうしても筆者の主張をそのまま受け止めてしまいがちであるが、2つの文を比較しながら読むことで、文章の表現には書き手の目的や意図が表れるものであるということに気づけるであろう。本単元を通して、いくつかの情報を比較し、自分なりに考えて結論を導いていくという読み方を身に付けさせたいと考えた。（比較・関連づけ等によって、状況を的確に捉える力【要素B】）それが、実生活でも批判的に読むことにつながっていくと考えている。

次の表1は単元計画をまとめたもの、図1は「読み比べて考えよう」を単元構造図としてまとめたものである。

【表1 3年生「読み比べて考えよう」 指導計画（6時間扱い）】

時	授業名・授業内容	主な要素		
		A	B	C
1	『情報社会を生きる－メディア・リテラシー』を読んで、筆者の主張を捉えよう			
2	・ 作品を通読し、内容を知り、難解語句を調べる。 ・ 情報社会を生きる私たちは、メディア・リテラシーを身に付けるべきだという筆者の主張を読み取る。 ・ 構成や表現にみられる筆者の意図や工夫をあげ、その効果を考える。	○	◎	◎
3	〈現実が再構築されているとはどのようなことだろう～新聞を読み比べよう～〉		◎	○
4	・ 同じ事実を取り上げた新聞記事を読み比べ、伝え方の違いや、印象の違いを考え、自分の意見を述べる。			
5	〈説明的文章を読み比べて、批評しよう〉			
6	・ 「テクノロジー」について書かれた説明的文章『テクノロジーとの付き合い方』『テクノロジーと人間らし		◎	○
7	さを読んで、共通点や相違点をあげながら特徴をつかむ。 ・ 2つの文章を批評し、自分の意見を述べる。			



【図1 「読み比べて考えよう」 単元の構造図】

(2) 実際の授業の様子

第1時で、『情報社会を生きる—メディア・リテラシー』を読んだ後、第2時、第3時では、筆者の工夫に目を向けながら、全体の構成や主張を捉えさせた。「私たちがどれだけ情報の中で暮らしているかを最初に出し、利点の後で欠点を述べることで、メディア・リテラシーの必要性を感じさせている」、「メディア・リテラシーという言葉は⑦段落にしか出てこない。しかし、⑭段落でも、メディアの特性を理解し、私たち自身で情報社会をつくる必要があると言っており、筆者が言いたいことはここにある」という意見が出された。

第4時では、富士山の山開きについて書かれた2枚の新聞を比較し、共通点や相違点をあげていった。どんなことを伝えたいかによって、取り上げる写真やインタビュー内容が違うことや、見出しの与えるイメージが違うことなどがあげられた。比較読みについて「それぞれの良さがあるが、1つだけしか読まなかったらわからないこともあるかもしれない。」「同じ事実でも取り上げ方によって印象は違う。比較する、照らし合わせてみるということが大切だ」という意見が出てきた。

第5時、第6時では、第1時の感想の中にあった、「教科書も情報を発信するものではないのか」という意見を紹介し、教科書に載っている文章を比較することにした。2つとも「テクノロジー」について述べられた文である。「テクノロジーが人間を変化させた」という共通する部分をもちながら、2つの文には違った考え方が見られる。2つを読み比べながら、共通点や相違点を見つけていった。実生活での活用を考えた場合、2つの文章を読み比べ、どちらの文章が良いかということ述べることもより、いくつかの文章から、共感できる部分とそうでない部分を見つけ、そこから自分の考えをつくって述べるということの方が多。そこで、今回は、どちらの文に共感できるかということ課題とせず、「テクノロジーは人間を幸せにするのだろうか」という課題を設定した。「人間が作り出したということは必要であるからで、うまく付き合っていけば幸せになれる」という考えや「ヒトとしての能力が失われることは、生物として幸せなことではないのではないか」といった考えが出された。

(3) 生徒質問紙調査より

【表2 質問紙調査（事前）の調査結果】

	はい	いいえ
説明的文章を読むことは好きですか。	38%	62%
複数の情報をもとにして、自分の考えを決めたことがありますか。	75%	25%
同じテーマに関する資料や本を比較して読んだことがありますか。	18%	82%

【表3 質問紙調査（事後）の調査結果】

	はい	いいえ
説明的文章を読むことは好きですか。	67%	33%
「読み比べて考えよう」の学習後、文章の読み比べをしましたか。	40%	60%
今後、文章を読み比べて考えようと思いますか。	90%	10%

授業前に事前調査をおこなったところ、「説明的文章を読むことは好きですか」という質問に対して、「はい」と答えた生徒は38%であった。2年生のときにおこなったアンケート調査では「文学的文章を読むことは好きですか」という質問に対して89%の生徒が好きだと答えている。事前調査では「読むこと」の中でも、説明的文章を読むことを苦手としている生徒が多いことがわかった。

「複数の情報をもとにして自分の考えを決めたことがありますか」という問いに対しては、75%の生徒が、経験があると答えた。「物を買うとき」を経験としてあげた生徒が多かった。「調べ学習をするとき」をあげた生徒もいたが、「同じテーマに関する資料や本を比較して読んだことがありますか」という問いに対しては「いいえ」と答えている。それぞれを資料として活用はしているが、比較しながら考えるということはしていないようであった。生徒全体の

8割以上が比較して読んだことがないと答えたことから、読み比べる経験は少ないということがわかった。

また、説明文が好きだと答えた生徒の約70%が「知識が得られること」と答え、嫌いだと答えた生徒の80%が、「専門的な知識が多く、難しい」と答えた。生徒は、説明的文章の学習は、知識を受け取るという受け身の姿勢で読んでいるのだと考えられる。筆者の主張を正しく読み取るということだけでなく、説明的文章を批判的に読むということにも目を向けさせていきたいと考え、比較読みの授業を進めていった。

授業終了後1週間経過したところで、質問紙調査をおこなった。「説明的文章を読むことが好きですか」という質問に対して、「はい」と答えた生徒が67%であった。また、「授業後、文章の読み比べをしましたか」という質問に対し、「はい」と答えた生徒は、全体の40%であった。新聞を読み比べたり、調べ学習のときに、違う資料をいくつか読み比べたりしたというものが多かった。また、文章の読み比べはしていないが、ニュース番組をいくつか見比べて、考えや主張が違うことを実感したと書いた生徒も見られた。「今後読み比べて考えようと思いますか」という質問に対しては、90%の生徒が「はい」と答えている。

(4) 参観者の感想より

第7時を参観してくださった先生方に感想をいただいた。

【「テクノロジーは人間を幸せにするか」という課題について】

○「立場を決める問い」は良いと思う。

○2つの文章を自分なりの解釈、言葉で捉え直していたと考えると適切だった。

△少し難しいと思いました。もう少し絞って、2つの文章のどちらに賛成かや、どんな影響をもたらすかなどにして、まとめて「幸せにするか」を個人に返しても良かったのかなと思います。

△文章を引用しながら意見を述べている生徒もいたが、自分に置き換えて考えすぎている生徒もいた1つの文章にしか触れていない生徒が多かったので、批評できているかと言われると不十分であった。

【メディアリテラシーについて学ぶ→新聞比較→説明的文章を比較しながら読むという流れについて】

○効果的だったと思います。この単位を通して、テクノロジーについて他の文章を読んでみたいとか、同じテーマだけど、書かれている内容の違う新聞記事を読んでみたいと思う子が増えそうです。

○適切であったと思う。知識を与えてから、写真や見出しなど、視覚的な情報からも比較できる新聞をワークセッションはさむことで、生徒は取り組みやすい。

△立場を明確にすることが、比較して読む上で重要になるのではないかと考えています。説明文の比較はとても面白いと感じると同時に難しさを感じました。

(5) 成果と課題

授業を終えてからの質問紙調査で、4割の生徒が、文章の読み比べをおこなっているという結果が出たこと、9割の生徒が今後読み比べをしようとしていること、説明的文章が好きだと答えた生徒の割合が増えたことから考えて、「生徒に説明的文章比較しながら読むことの良さを感じさせ、活用していこうという思いをもたせる」ことについては一定の成果があったと言える。多くの生徒が、単元の最初に得た知識【要素A】をもとにしながら、比較・関連づけをしながら読み、思考していくこと【要素B】によって、新しい状況でも読み方を利用しようとする【要素C】ということができていたと言えそうである。しかし、今後読み比べをしたいかという質問に対して「いいえ」と答えた生徒も少数いた。いずれも単元の学習前も学習後も説明的文章が嫌いだった生徒である。そのような生徒に、どのようにして説明的文章に触れる機会をもたせ、学びを活用させていくかということが今後の課題の1つである。

第7時の参観者の感想や、多くの生徒が、読み比べを今後したいと考えているという結

果から、メディア・リテラシーについて学び、視覚的にも比較しやすい新聞を読み比べ、最後に説明的文章を読み比べるという流れは良かったと言えそうである。新聞の比較だけでなく、説明的文章の比較もおこなったことで、生徒は「どの文章を読むときにも言えること」という視点をもてたようである。「書く人の立場によって意見や伝え方が違うので、1つだけを信用するのではなく、たくさん読んで考えることが大切」「今まで読み比べを意識して文章を読んだことがなかった。論理的文章を比較して読んでみようと思う」という意見が生徒から聞かれた。しかし、「テクノロジーは人間を幸せにするのだろうか」という課題を設定したことに対しては、問題が残った。今回は、あえて、どちらの文章に共感するかという課題にしなかったが、それが、文章から離れて、経験による意見を述べることにつながりやすくなってしまった。自分の立場を明確にしながらも、文章に戻りやすい問いの設定や、文章に戻す手立てが必要であったと言える。

3 1年生『『トロッコ』の名シーンを創り出そう』における授業実践について

(1) 本単元について

生徒たちは文学的文章を読む際に、文章中に表れている出来事や登場人物の言動・心情を断片的にとらえることに留まり、狭い範囲での読みにおさめてしまいがちである。登場人物の生き方や感情の変容、作品の魅力を多角的にとらえるためには、イメージを具体化することが重要だと考える。本単元では、物語の一場面を映像化するという活動を取り入れる。映像化するにあたって、生徒たちには1枚の絵(カット)だけを提示する。1枚の絵(カット)で構想を伝えるためには、その場面の前後や物語全体を細部まで読みこみ、情報を集めることが必要になる。さらに、構想にこめた思いを伝えるという条件を設定することで、言外の思いを察してイメージを膨らませ、作品にこめられた思いまで読み取る力【要素B】の向上につながるであろう。今回の活動を通して、文学的文章の読み方に多角的な観点が加わり、実生活や学習の中で作品にあたる際に、イメージを具体的に描きながら読むことにつながると考えた。

次の表1は単元計画をまとめたもの、図1は『『トロッコ』の名シーンを創り出そう』を単元構造図としてまとめたものである。

【表1 1年生『『トロッコ』の名シーンを創り出そう』 指導計画(9時間扱い)】

時 間	授業名・授業内容	主な要素		
		A	B	C
1 2	<「トロッコ」を読み、物語終末部直前までの展開を確認しよう> ・「トロッコ」を通読して初発の感想を記入し、不明語句の意味調べを行う。 ・物語冒頭から、良平が村へ引き返し始めるところまでの流れをおさえる。情景描写や表現技法等にも注目させ、良平の気持ちを表す様々な方法があることを理解する。	◎	○	○
3 4 5	<映像化の構想を練る際のポイントを確認し、グループで構想を考えよう> ・教師が映像化するための構想例を紹介し、今後の活動の見通しをもち、個人で構想を練る。 ・グループで意見交換をおこない、より良い構想について考えを深め合う。	○	◎	○
6 7 8 9	<映像化することを通して、文学的文章の読み方を考えよう> ・中間発表会をおこない、なぜ構想にこめた思いが伝わらないのか課題を見つけ改善する。 ・同じ場面、似た演出・構想の班から代表班が出て、発表する。 ・前時の感想や評価を伝え合い、文学的文章の読み方について考えを深める。	○	◎	◎



【図1 「『トロッコ』の名シーンを創り出そう」 単元の構造図】

(2) 実際の授業の様子

第1時で、「トロッコ」を読んで初発の感想を書いた後、第2時では、物語終末部直前までの内容について、主人公良平の行動に注目しながら捉えさせた。行動や台詞だけでなく、背景や表現技法などから登場人物の心情を読み取るという視点を広げた。

第3時では、教師が映像の構想を練る際の注意点をふまえ、物語前半部分の中で取り上げた場面について、構想を例示した。条件を確認し、物語終末部分の中から自分たちで場面を選び、構想を立てていった。構想を練ることを通して、「構想にこめた思いを伝えるために、背景などを考えたが、文章中の根拠をもとに設定できた」「なぜ良平の表情をそのように設定したのか説明するために、前後の場面の流れもおさえた上で、良平の心情の変化を捉える必要があると感じた」という意見が出てきた。第4時、第5時では、個人で立てた構想をグループ内で発表し、どの場面のどの構想が魅力的か考えを伝え合った。グループで場面を1つに絞って構想をまとめ、よりよい構想にするために意見を交わした。

第6時、第7時では、グループで立てた構想を部分的に全体場で発表し、構想を聞いてどのような思いが伝わるのか意見を求めた。その後、なぜ構想にこめた思いが伝わったのか、伝わらなかったのか、グループで振り返りを行い、構想を練り直した。第8時では、同じ場面を選んだり、似た構想を立てたりしたグループごとに、構想のプレゼンをおこなった。構想にこめた思いに共感・納得するが、構想の内容について疑問をもつ生徒、構想にこめた思い自体に疑問をもつ生徒など様々であったが、文章中の根拠をもとに話し合いが行われていた。授業の振り返りをおこなった際には、「カメラアングルなどの構想を考えるにあたって、本文を読み込んで根拠を探し、どんな点に注目したらよいかがあった。初めて読んだときと、構想を考えるために読んだときとでは、内容の印象がかなり変わった。もっといろいろな作品や場面を、今回のように読み進めていきたい」という考えや、「今回の授業では、背景や表現技法などから、根拠に基づいた想像をすることができ、物語を通して伝えたいことが言葉の中にヒントとして隠されているとわかった。また、同じ根拠から考えた構想なのに、意見や考え方が違う班があって、物語はいろいろな視点や角度から読むことができるということも学んだ」という感想が出された。

(3) 生徒質問紙調査より

【表2 質問紙調査（事前）の調査結果】

	はい	いいえ
文学的文章を読むことは好きですか	84%	16%
登場人物の心情の変化を読み取る学習は好きですか	79%	21%
文学的文章の学習を通して、日々の読書活動への関心が高まったり、読み方が変化したりしたことはありますか	55%	45%

【表3 質問紙調査（事後）の調査結果】

	はい	いいえ
文学的文章を読むことは好きですか	91%	9%
登場人物の心情の変化を読み取る学習は好きですか	80%	20%
映像の構想を考える学習の後、日々の読書活動への関心が高まったり、読み方が変化したりしましたか	59%	41%

単元の学習の前に事前調査をおこなったところ、「文学的文章を読むことは好きですか」という質問に対して、「はい」と答えた生徒は 84%で、「読むこと」の学習の中でも、文学的文章は得意としている生徒が多いことがわかった。また、「登場人物の心情の変化を読み取る学習は好きですか」という質問に対しては、79%の生徒が「はい」と答え、その中の約 80%の生徒が「登場人物の心情を読み取ることが楽しいから」と答えており、文学的文章の魅力は、登場人物の心情の読み取りと深くつながっていることがわかる。

しかし、「文学的文章の学習を通して、日々の読書活動への関心が高まったり、読み方が変化したりしたことはありますか」という質問に対しては、「はい」と答えた生徒は 55%、「いいえ」と答えた生徒は 45%であった。文学的文章を読むこと自体は好きな生徒が多いものの、その作品の中だけで読み取りは終わり、他の作品の読み取りや日々の読書活動に対しては、学習したことが生かされきれていないことがわかった。イメージを膨らませ、多角的な読み方を知ることが、今後の「読むこと」の学習や読書活動に生かされると考え、文学的文章を映像化する学習を進めていった。

単元の学習が終了したところで、再度質問紙調査をおこなった。「文学的文章を読むことは好きですか」という質問に対して、「はい」と答えた生徒が 91%と、わずかであるが上昇した。また、「登場人物の心情の変化を読み取る学習は好きですか」という質問に対して「はい」と答えた割合が 80%、「映像の構想を考える学習の後、日々の読書活動への関心が高まったり、読み方が変化したりしましたか」という質問に対する「はい」の割合は 59%と、大きな変化は見られなかったが、「物語を読む際の読み方の幅が広がった」「これから読書をする際にイメージを膨らませて読みたい」といった意見が見られた。

(4) 参観者の感想より

第 8 時を参観してくださった先生方の感想を抜粋

【「映像の構想と、構想にこめた思いについて考えを伝え合おう」という課題について】

- 文章を視覚化する活動は、「イメージを思い描き、状況を的確に捉える力」につながるので適切だったと思います。
- 読み取ったことを映像化する活動は、1 枚の絵からイメージを共通化し、表現・発想を広げられるので、「新たな見方や考え方を広げる」ことにつながったと思う。
- △お互いに批評することは、3 年生でも指導事項になるほど難しく、「新たな見方・考え方を広げる」ことにはつながりにくい気がしました。
- △「伝え合う」という視点で見たときに、どんなポイントに気をつけて話したり聞いたりすればよいのかわかっていない生徒もいて、話合いを深めたり広げたりできたか見取るのが難しかった。

【構想を組み立てる際に視点と条件を与える指導について】

- 視点のキーワードに気をつけて、実際に使いながら話し合っていたので、どこを見ればよいのかわかり、伝わりやすくなった。理由付けしていたのもよかった。
- 「表情をアップにすると、心情は伝わるけれど情景が見えなくなる」という意見が出ていた。どうしたら効果的になるかは個人の感性の違いが出る。面白いアプローチだった。
- △「構想にこめた思い」を考えるには、カメラアングル・背景・表情・色や音について、なぜそうしたのかを提示せずに、深く考えさせた方が言葉を根拠にした話合いになると思います。

(5) 成果と課題

単元の学習終了後の質問紙調査で、日々の読書活動への関心が高まったり、読み方が変化したりしたという生徒が全体の 59%と、わずかであるが数値が上昇したこと、また、文学的文章が好きだと答えた生徒の割合も上昇したことから考えて、文学的文章を映像化することを

通して、要素Bの「イメージを思い描いたり、言外の思いを察したりする力」を身につけさせることについては、一定の成果があったと考えられる。しかし、映像の構想を伝え合うという場面では、課題が残った。伝え合うからには、全員が共有できる「条件」や「材料」が必要である。授業を参観していただいた方の感想に、「カメラアングルは何か良くて何が悪いのか評価しづらい」というものがあった。考えを話し合い深め合うためには、「条件」や「材料」を共有するだけでなく、それが具体的に評価し合えるものなのかどうかを吟味する必要性があると改めて感じた。また、授業形態にも課題が見つかった。今回は、異なる場面の構想を考え代表班3つに発表させた。多面的な考え方・読み方があることに気づかせるのが狙いとしてあったが、場面が異なった分思考も分散し、広く浅い話合いに終始してしまった。深め合うというのであれば、1つの場面に限定し、なぜその場面で安心感が表れるのか、なぜ不安感が表れるのかなど、深く細かい追究を多角的にさせるべきであった。

また、登場人物の心情を読み取ることは好きかという質問に対して、全体の割合が事前アンケートとほぼ変わらなかったことも、今後の課題としてあげられる。これは、国語科の「習得と活用」の「活用」の部分に関わってくると考えられる。今回の単元では、前半部分の主人公良平の心情変化を読み取る活動をおこなった後、映像の構想づくりに移った。「映像の構想を立てる」際に心情変化を読み取る経験を「活用」させようと考えていたが、上手くつながらなかったことが、本時の発表の深まり方にも表れてしまった。生徒の感想の中に、「同じ場面を選んだ人同士でも、どういった構想にするのかが違っていたので面白かった。文からその絵を想像して物語を読むことも大切で楽しいと思った。」というものがあったが、「面白い」「楽しい」という言葉が、表面的な部分にしか目を向けられておらず、新たな見方・考え方を広げるまでに至っていないことを表しているように感じる。今後へ向けて、「活用」に至るまでの「習得」の学習を丁寧におこなうこと、また、「習得」から「活用」へ円滑につなげるための手立てを工夫していくことが求められる。

4 国語科としての成果と課題

どちらの実践においても、追究用紙や事後の質問紙、参観者の感想から見て、新たな読み方を示し、今後の読みにつなげるという点では一定の成果があったのではないかと考えている。

3年生でおこなった、説明的文章の実践では、多くの生徒が読み比べの良さを感じ、今後活用していこうと考えていることがわかった。単元の最初に得た知識【要素A】をもとにしながら、比較・関連づけをしながら読み、思考していくこと【要素B】によって、新しい状況でも読み方を利用しようとする【要素C】が、おおむねできたと考えている。1年生でおこなった、文学的文章の実践では、映像化することによって、イメージを思い描いたり、言外の想いを察したりする力を身に付けさせること【要素B】については、成果があった。

しかし、今回の実践だけで、今後の読書活動や生徒の読む力につながるわけではない。年間を通して継続しておこなっていくことが、主体的な読み手を育て、読書の質を高めることにつながっていくのだと考える。今後の実践の中でも、学んだことが活用される場を設定していきたい。

また、2つの実践のどちらにおいても、活用する部分で課題が残った。説明的文章の実践では、活用をねらった発問であったが、文章に寄り添った思考につながりにくかったという点が課題となった。また1年生の文学的文章の実践では、「映像の構想を立てる」際に、心情変化を読み取る経験を「活用」させることができず、習得したものを活用させるという部分において、課題が残った。

「読むこと」以外においても、言葉から考え、考えを深めるための課題設定や、授業形態、学習材の選定は不可欠である。今後さらなる検討を重ね実践を積んでいきたい。